

第3子出産後2年間にわたる母親の 育児体験に関する縦断的記述研究

遠藤 俊子¹⁾ 野澤美江子¹⁾ 安藤 正子²⁾ 渡邊 竹美³⁾ 伏見 正江⁴⁾

要 旨

第3子を出産した母親に焦点をあて、第3子出産後2年間の縦断的な育児体験の記述から、第3子育児の特徴を導き出すことを目的に、1995年7～9月に第3子を出産した母親39名に、出産後1、6、12、24カ月の計4回、家庭訪問を行った。その結果、妊娠の計画性、妊娠希望の有無による出産後の育児に違いがみられるのは、出生直後の母親の反応のみであり、その後の育児において差異はみられなかった。また、第3子育児の特徴は、上の子の育児体験が活かされ、熟達した育児技術がとれている点にあった。しかし、育児の大変さは3人の子どもに同時に対応する時間や空間的な余裕のなさであり、その時期は6カ月頃から始まり、24カ月頃まで続くことが明らかになった。

キーワード：第3子、育児、母親

I はじめに

我が国においては少子化が進み、1997年の合計特殊出生率は1.39で、出生数は119万人、そのうち、第3子以上出産割合は15.4%であった¹⁾。少子化の原因として、晩婚化、生涯未婚者の増加、経済的問題など様々な原因が考えられる。既婚女性の出生率低下の原因としては、既婚女性の就業率の上昇に伴い、仕事と家事・育児の両立という女性にとっては、より負担の多い役割分業に移ったことや子育てへの不安などがあげられる。また、既婚者では理想の子ども数を3人とするものの割合が最も多く平均2.53人であるが、実際に平均子ども数は2.21人と理想を下回っている²⁾。

第3子の妊娠・分娩・育児が母親や家族にとってどのような意味を持つのか、諏訪ら³⁾は3人以上の子どもにはその子自身から受ける刺激やおもしろみに価値観をおいており、3人以上の子どもを持つことにより、親の価値観が変化するこ

とを報告している。我々看護職が、出会う第3子を持つ母親についても同様の感想を持つことが多く、第3子の育児に興味を持っていた。

今回、我々は第3子を出産した母親に焦点をあて、第3子出産後2年間の育児体験を縦断的に記述することによって、第3子育児の特徴を導き、合わせて今日、子育て支援策が様々な提案がされているが、子どもを産み育てることに「夢」をもてる社会の実現のために、第3子を持った母親にどのような支援が必要であるのかも検討することとした。

II 方 法

1 対 象

山梨県A市およびB市に居住し、1995年7月～9月に第3子を出産した母親で、調査の同意の得られた39名

2 方 法

(所 属)

1) 山梨県立看護大学

2) 富士吉田市立看護専門学校

3) 埼玉県立大学短期大学部助産学専攻科

4) 山梨県立看護大学短期大学部

(専攻分野)

母性看護学

母性看護学

助産学

母性看護学

- 1) A・B市役所において、出生連絡票をもとに対象者の把握。
- 2) 調査依頼書の郵送。
- 3) 電話にて、研究および訪問の趣旨を再度説明し、同意を得た母親を対象とした。
- 4) 対象者全員に、出産後1カ月、6カ月、12カ月、24カ月の計4回、同一の研究者により、家庭訪問を行い、参加観察ならびに半構成式インタビューを行った。

3 インタビュー項目は、母親、家族の属性、第3子の月齢に応じた育児の特徴的出来事（6カ月：離乳の進め方、12カ月：病気の対応、24カ月：事故防止）に関わる母親の行動と育児のとりえ方、現在の思い、である。

4 分析

参加観察ならびにインタビューデータに対して研究者全員で、質的に内容の分析を行った。なお、調査期間中の脱落者についても追跡可能な時点までを含めて分析を行った。

5 倫理的配慮

研究の趣旨説明の後同意を得ること、ならびに縦断的研究であるため、中止を希望できること、市町村保健婦のサービスの提供に不利益が生じないこと、ならびに発表に際しては対象者が特定できない配慮を行うこととした。

Ⅲ 結 果

1 対象の属性

第3子出産時の母親の年齢平均は 32.5 ± 3.2 歳、父親の年齢平均は 36.0 ± 4.5 歳であった。母親は有職者が8名（20.6%）、父親は全員が有職者で、その内自営業が16名（41.0%）であった。家族形態は核家族33名（84.6%）であったが、そのうち16名（48.5%）が近所に親が住んでおり、近親者のサポートのない家族は17名（43.6%）であった。

第1～3子の年齢差は2～9歳で平均 5.8 ± 2.1 歳であったが、4歳以下が11名（28.2%）あった。

訪問は当初1カ月39名、6カ月36名（92.3%）、12カ月32名（82.1%）、24カ月29名（74.4%）となった。（表1）

2 妊娠の計画性

1) 妊娠の計画性と属性

妊娠が計画的であった者が16名（41.0%、以下A群とする）、妊娠は計画外であったが3人目を希望していた者18名（46.2%、以下B群とする）、妊娠は計画外で3人目を希望していなかった者5名（12.8%、以下C群とする）であった。表2は、第3子妊娠の計画性別に母親の年齢、職業、家族構成、サポートの受けやすさを比較したものである。母親の年齢別では、A群 32.3 ± 3.1 歳、B群 32.2 ± 3.2 歳、C群 34.0 ± 4.1 歳であった。母親の職業別に比較してみると、無職の者はA群11名、B群15名、C群5名であった。家族構成別に比較してみると、複合家族の者はA群3名、B群2名、C群1名であった。サポートの受けやすさ別に比較してみると、親と同居している又は親と同居していないが近くに住んでいる者はA群12名（75.0%）、B群9名（50.0%）、C群1名（20.0%）で、A群がサポートを受けやすい状況であった。これらの属性の間で有意差はなかった。

2) 妊娠の計画性と出産の動機

出産動機は、A群では「子どもは3人ほしい」が多く、B群では「子どもは3人欲しい」「違う性別の子どもへの期待」が多く、C群では「家族が子どもを希望」が多かった。（表3）

3) 妊娠の計画性と出産後の母親・父親の反応

出産後の母親の反応（複数回答）は表4に示すように、A群では「子どもに対する感情表現」が多い。B群では「子どもに対する感情表現」「無事生まれたことに対する表現」「上の子と比べての表現」が均等に、C群では「子どもに対する感情表現」「無事生まれたことに対する表現」がみられた。

父親の反応は、妊娠の計画性に関係なく、一様に喜んでいた。

3 母親の育児状況や育児のとりえ方

1) 生後1カ月：対象数39名

出産後1カ月間の育児体験で感じたことを語ってもらったところ、育児に対する満足感27名（69.2%）が最も多く、次いで上の子どもの育児

表1 対象の属性・訪問状況

事例 No.	母年齢	母職業	家族構成	サポート	妊娠の計画性	1子～3子 の年齢差 (歳)	1カ月 n=39	6カ月 n=36	12カ月 n=32	24カ月 n=29
1	33	無職	核家族	なし	計画外希望	6	●	●	●	×
2	33	無職	核家族	近くに住む	計画的	5	●	●	●	●
3	30	無職	核家族	近くに住む	計画外希望	5	●	●	×	×
4	40	無職	核家族	なし	計画外	9	●	●	●	●
5	30	無職	核家族	近くに住む	計画外希望	7	●	●	●	●
6	35	無職	核家族	なし	計画外希望	7	●	●	●	●
7	36	無職	核家族	近くに住む	計画的	9	●	●	●	●
8	33	無職	複合家族	同居	計画的	4	●	●	●	●
9	39	無職	核家族	なし	計画外希望	6	●	●	●	●
10	32	無職	複合家族	同居	計画外	8	●	●	●	●
11	31	無職	核家族	近くに住む	計画外希望	7	●	×	×	×
12	34	無職	複合家族	同居	計画的	6	●	●	●	●
13	29	無職	核家族	近くに住む	計画的	2	●			
14	27	無職	核家族	なし	計画的	4	●	●	●	●
15	31	無職	核家族	なし	計画的	4	●	●	●	●
16	34	無職	核家族	なし	計画外希望	6	●	●	●	×
17	26	無職	複合家族	同居	計画的	3	●	●	●	●
18	34	無職	核家族	なし	計画外	9	●	●	●	×
19	31	有職	複合家族	同居	計画外希望	6	●	●	●	●
20	29	無職	核家族	なし	計画外	2	●	●	●	●
21	28	無職	核家族	なし	計画外希望	4	●	●	×	●
22	33	無職	核家族	なし	計画的	7	●	●	×	●
23	30	無職	核家族	近くに住む	計画外希望	3	●	●	●	×
24	36	有職	核家族	近くに住む	計画的	4	●	●	●	●
25	35	無職	核家族	なし	計画外	5	●	●	●	●
26	31	有職	核家族	近くに住む	計画外希望	3	●	●	●	●
27	35	無職	核家族	近くに住む	計画外希望	4	●	●	●	●
28	28	無職	核家族	なし	計画外希望	9	●	●	●	●
29	36	有職	核家族	近くに住む	計画的	6	●	●	●	●
30	36	無職	核家族	なし	計画的	5	●	●	●	●
31	32	無職	核家族	近くに住む	計画的	8	●	●	●	●
32	34	無職	核家族	なし	計画外希望	9	●			
33	35	無職	核家族	なし	計画外希望	5	●	●	●	●
34	27	無職	核家族	なし	計画外希望	4	●	●	●	●
35	31	有職	核家族	近くに住む	計画的	5	●	●	●	●
36	32	有職	核家族	近くに住む	計画的	8	●	●	●	●
37	35	無職	複合家族	同居	計画外希望	8	●	●	×	×
38	34	有職	核家族	近くに住む	計画外希望	8	●	●	●	●
39	31	有職	核家族	近くに住む	計画的	6	●	●	●	×

32.5±3.2歳 有職 8名 核家族33名 なし17名 計画的16名 5.8±2.1歳
 無職32名 複合家族 6名 同居 6名 計画外希望18名
 近くに住む16名 計画外 5名

表 2 妊娠の計画性と属性

	母年齢の平均 (歳)	母 職 業 (人)		家族構成 (人)		サポート (人)			1子～3子の年齢差の平均 (歳)
		無職	有職	核家族	複合家族	同居	近くに住む	なし	
A群 (計画的妊娠)	32.3±3.1	11	5	13	3	3	9	4	5.4±1.9
B群 (計画外妊娠であるが3人目を希望)	32.2±3.2	15	3	16	2	2	7	9	5.9±1.9
C群 (計画外妊娠で3人目を希望せず)	34.0±4.1	5	0	4	1	1	0	4	6.6±3.0

表 3 妊娠の計画性と出産動機

	A群	B群	C群	合計
1. 子どもは3人欲しい	9 (56.3)	5 (27.8)	0 (0.0)	14 (35.9)
2. 上の子どもと違う性別の子どもへの期待	1 (6.2)	5 (27.8)	0 (0.0)	6 (15.4)
3. 家族が子どもが好き・家族の希望	3 (18.8)	2 (11.1)	4 (80.0)	9 (23.1)
4. 上の子どもの死	1 (6.2)	2 (11.1)	0 (0.0)	3 (7.7)
5. 上の子どもから手が離れた	0 (0.0)	3 (16.7)	0 (0.0)	3 (7.7)
6. 3人の子どもの持つ母親を見て	2 (12.5)	1 (5.5)	0 (0.0)	3 (7.7)
7. 子どもの協力が得られる	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (20.0)	1 (2.5)
	16 (41.0)	18 (46.2)	5 (12.8)	39 (100.0)
	人 (%)			

表 4 妊娠の計画性と出産後の母親の反応

	A群	B群	C群	合計
1. 子どもに対する感情表現	13	9	3	25
2. 無事生まれたことに対する表現	3	9	3	15
3. 上の子どもと比較しての表現	4	9	1	14
4. その他	6	1	1	8
回 答 数	26	28	8	62

体験や上の子どもとの違い18名 (46.2%)、第3子はかわいい11名 (28.2%) であった。その他、上の子どもとの関わり、育児に取り組む姿勢、将来への希望などがあがった。育児に関する不安に関しては、性の違う子どもの場合のみ「心配」という発言がみられた。

2) 生後6カ月：対象数36名

生後6カ月という時期は、離乳食が本格的となる。そこで、離乳食の進め方から育児に対する方法や考え方をみた。

訪問時、36名全員が離乳食を開始していた。開始のきっかけは、「欲しがるので始めた」という子どもの状況、「面倒だから、ちょっと遅めに始めている」「时期的に忙しいので、少しずらした」という母親側の状況、「保育園の先生に勧められ

たので始めた」という周囲からの勧めによるものに分類出来た。

進め方としては、図1に示す。子どもの反応を見ながら進めており、何回食べると決めて答えた人はいなかった。子どもの反応を見ながら進めるという内容としては、以下のことがあげられる。

- ①子どもの反応に応じて進める。これには子どもの嗜好について味付けや上の子どもとの比較、子どもの反応をみながらアレンジしているという「離乳食の内容」や、よく食べるから少し食べさせすぎる、ムラがあるがよく食べる、食べない時は無理強いしない、上の子どもが食べているものを欲しがるので食べさせてしまうという「子どもの食欲」に関することであった。
- ②子どもの便の様子を見ながら進める。便が堅

い場合には、水分を多めに与えたり、子どもがよく食べるので食べさせ過ぎた場合、便秘や下痢をするという「便の性状の変化を見て食べさせ方の調整」をすることであった。

③子どもの身体状況にあわせて進める。子どもの具合が悪い場合には、無理に食べさせることはせずに一旦離乳食を中止し、体調が回復してから再開するという「子どもの具合が悪い場合の対処」であった。

④上の子ども達の関わりによって進め方が決まる。上の子どもが食べているものを欲しがると、上の子どもが食べさせてしまうという「子ども達の関わり」であった。

また、離乳食の作り方については、離乳食は特別には作らない、手を抜いているという回答が目立った。

3) 生後12カ月：対象数32名

生後12カ月の時期は、先天性免疫の低下や、子どもの外出機会の増加により感染の可能性も増える。そこで、病気時の母親の対処から、育児の方法や考え方をみた。

生後12カ月までに何らかの病気になった子どもは28名（87.5%）であった。罹患した病気は「風邪」「中耳炎」「発熱」「喘息」などであった。受診した子どもは20名で、受診しなかった子どもは

8名であった。受診しなかった理由として、このくらいの症状だったら衣類の調節、冷やす、市販の薬の服用などで対応していたことがあげられた。その根拠には、上の子の病気時の対処経験が大きかった。受診行動を決めた要因は図2に示した。子どもの反応・様子の観察をしてから受診の要否を決めていた。その前提には、病気の知識、上の子どもの罹患時の経験との比較から、子どもの反応・様子を観察し、症状や罹患期間、普段からの健康状況と関連させ、受診行動をとっていた。また、上の子どもへの感染や家族への波及も考えて早めに受診していることもみられた。

4) 生後24カ月：対象数29名

①生後24カ月の時期は、子どもは自分で何でもしたがる好奇心が旺盛で、行動範囲も広がり、事故など危険な時期である。この危険防止の方法と考え方をみた。

危険防止対策をしている母親が27名、特に意識していない母親は2名であった。図3は、母親の危険防止対策である。具体的な対策としては、家庭内や道路での対策であり、子どもがどのような行動をとるか予測をもってあたり、子ども自身の行動をむやみに制止していなかった。実際には家族、特に上の子の注意を喚起していた。上の子に話して聞かせる、上の子に任

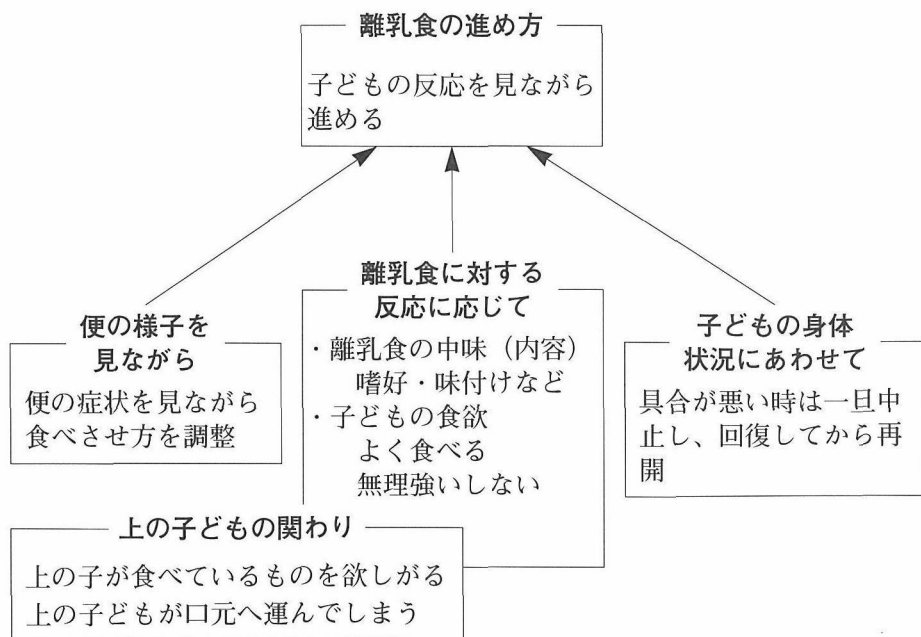


図1 離乳食の進め方

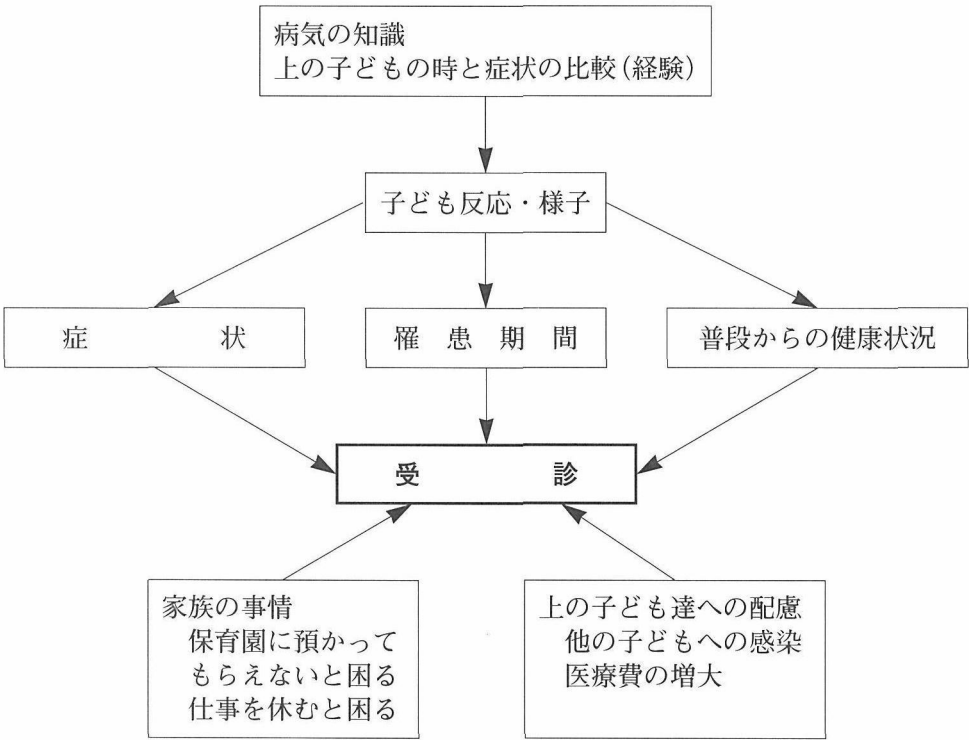


図 2 受診行動を決める要因

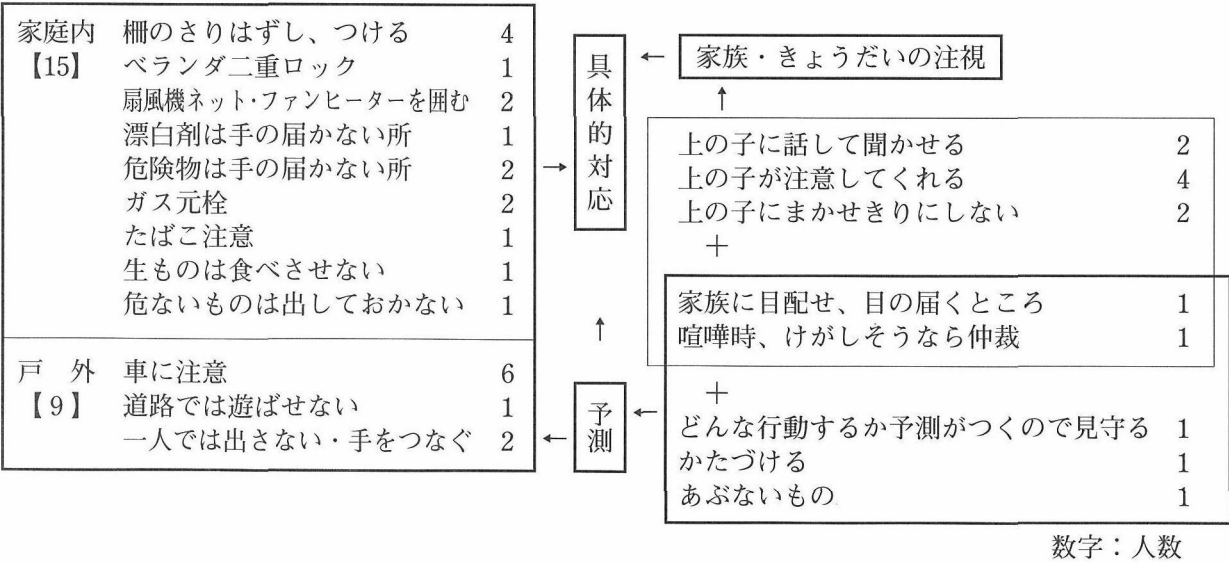


図 3 危険防止対策

せきりにしない、目の届くところで遊ばせるなど、多くの母親が上の子を教育しながら活用し、なおかつ目配せしていた。

②24カ月時点で母親の認知する第3子育児の特徴と育児のとらえ方

第3子は自己主張がはっきりしており、自己表現がうまく、何でも早いということが共通した感想であった。しかし、上の子の影響を受けながら、上の子とは違う目で見ることができていた。

母親自身は子どもに対し、＜環境の中で育っていく＞10名（34.5%）、＜3人3様＞7名（24.1%）、＜時期がくるとできるようになる＞など、肯定的にとらえた者が多かった。

4 母親自身の2年間の思い

1) 生後1カ月

殆どの母親から＜かわいい＞＜余裕＞＜ゆったり＞＜育児を楽しむ＞＜楽ができる＞といった、第3子をもったことに対する満足感、余裕と上の子の育児と比較しての安心感にあふれていた。

2) 生後6カ月

＜子どもの機嫌が良くゆとりがある＞＜あまり悩まずに育児に取り組んでいる、いい意味でいい加減になった＞＜女の子は育てやすい気がする。今まで男の子だったから新鮮＞＜あまり手が掛からない＞＜楽しい、とにかく余裕がこんなにも育児に必要なとは思わなかった。今までと時間的には変わらないのだけど＞＜この子のペースだと思う＞＜子どもを落ち着いてみていられる＞等の表現に加え、＜3子が産まれてからお母さん怖い顔している、かりかりしていても仕方ないと思いはじめた＞＜余裕はあるが、3人セットは大変＞＜3子がいると荷物が多くなって、外出がおっくうになる＞というように、概ね満足ではあるが、3人を同時に育てる大変さを認識する表現が加わっている。

3) 生後12カ月

＜3人目は楽しんで育児している＞という表現をする母親は減少し、＜医者通いが増え、少々疲れている＞＜3人それぞれのペースに合わせるの

が大変＞＜その日その日が精一杯、時間に追い立てられる。ストレスのはけ口がない＞＜お昼寝の時間もなかなか思い通りにならない＞＜3人は、きつい＞＜目が届かないので、つい外で遊ばせることが少なくなった＞等、時間的に追い立てられている状況、3人の子どもへの同時対応が荷重となっている表現が目立つ。また、3人の子育て実態から＜おじいちゃん・おばあちゃんの協力がなかったら、育てられなかった＞＜子ども達のペースに自分の考えが合ってきているように思う＞＜子どもの成長を通し、親も成長した＞＜子どもは1人で色々してあげられるのも良いかなと考えもした＞＜早く子育てを終えて、自分のことを楽しみたい＞＜子どもは個性様々で、のんびり育児ができれば楽しい＞＜保育園に入園して、やっと手放せ、開放感を味わっている。自分の時間が持たなかった＞＜親が教えるより、生活の中で学んでいる＞＜子どもに鍛えられて強くなった＞＜これが最後と思うと、楽しんでおかねば＞といった、あきらかに近い子育てどっぶり心境が表現されている。

4) 生後24カ月

＜3人が一度にくるから、もーいやと思う時もあった＞＜3子が起きている時はストレスだが、寝顔をみると消えてしまう＞＜忙しさにかまけて、発見が少ない＞＜家の中のことも1日がかりでやっている。仕方ないと思うから、ストレスは感じていない＞＜一番買い物に出かけるのが大変。皆バラバラになるので、3子はおぶっている。あと半年くらいの我慢＞＜とても忙しい毎日である。もう少し時間も心も落ち着いて、つきあってあげたい＞＜3人目だけだと手は掛からないが、3人いると忙しい＞＜3人いると、かまっていられない。一番遅い子の手伝いをする＞＜一子とはあちこち出かけたが、3子とは出かけない＞という表現にみられるような3子そのものというより、3人いることの育児の大変さがみられる。しかし、良い意味でのあきらめであり、子育て覚悟を表現していた。さらに、年齢の高い母親は、＜子育てが膝にきた。年とってからの子育ては辛い＞＜同じ年頃のお子さんをもつ親御さんとは10

年も年が違うので、一緒に遊ぶこともしないから、子どもが可哀想に思う>などの感覚を味わっていた。

そう言いながらもこの時期になると、これから先の生活に目が向けられることも特徴であり、<臨時採用の話があるが、周囲に迷惑かけたくないから考えている><働きに出ようかと思っている。お金もかかるから><一番下の子が早く幼稚園に行ってくれると、楽になると思う><仕事は産まれる前はしようと思っていたが、あきらめた。3歳になると違うと思う><手の掛かる時期が一番かわいい。2歳になって少しずつ離れていくのを感じる。実家の手伝いを始めている><ママさんバレーに復帰した>のように、仕事への希望や、子育て意外のことにとりかかる準備を始めている。一方、<あつという間の2年間。このまま赤ちゃんでいてくれたらと思う><あと3年若かったら、もう一人産みたい、小さい子をみているとまた赤ちゃん欲しいなと思う><もうちょっと赤ちゃん時代が長いといいのに、また赤ちゃん欲しくなる>のような、赤ちゃんの母親としての自分を失う寂しさを強く感じていた。

IV 考 察

1 妊娠の計画性、動機とその後の育児

依田⁴⁾が行った調査では、第3子以上で計画出産した人は4割であったが、本調査も同様であった。妊娠の計画性や希望について、3人目を希望しない群は母親の年齢や上の子どもの年齢が若干高い傾向や、周囲のサポートがない傾向が見受けられるものの、統計上の有意差がなかったことは、対象数の少ないことが考えられる。なぜなら、理想と実際の子ども数に差がある理由について、大沢⁵⁾は、経済的問題、父母の年齢の問題、養育者の問題を挙げていることから、それらの背景が予測できるからである。

一方、妊娠を計画していた者は、出産の動機に「子どもは3人欲しい」をあげている者が多く、理想とする子ども数3人と一致している。計画外妊娠であるが、第3子を希望した人は、一旦子どもは2人でいいと生活していたが、妊娠をきっか

けに3人でもいいかと変化した。その反応は、子どもの成長や性別の違いが影響しているとも考えられる。いずれにしても、第3子妊娠の計画性に関わらず、妊娠したら産むという人が18人もいたことには注目する必要があると考える。

また、妊娠の計画性による出産時の子どもに対する反応の違いをみると、母親の反応は出産動機と多少なりとも関連するのではないかと感じるところはあるが、父親の反応に関連ないことは興味深い。

2 育児技術の熟達

第3子の育児の特徴として、育児技術の熟達があげられる。上の子の子育て経験が大きく影響していることがわかった。上の子とも比較した1ヶ月時の母親の育児体験をはじめとして、その後の離乳食の進め方、病気に罹患した時の対処、危険防止策のいずれをとっても、育児知識の蓄積や上の子どもの育児経験を基盤として対応している。

そして、今までの経験をもとに、第3子の反応や様子を多面的に把握し判断することや、実際にとられる対応策が豊富に用意され、実際合理的に行われている。

その結果、母親は無理せずゆとりを持って育児が行え、育児に対する満足感に影響を与えていると考える。このことは大藪ら⁶⁾が育児満足感に有意な影響を及ぼす要因の1つとして母親の落ち着きをあげているように、3人の育児経験を通して落ち着きがその背景にあると考える。また、第3子に対する母親の認知として、自己主張がはっきりしているということを好ましく受け止めていたことや、子どもというものは人間関係を通して育っていくものだという感覚を獲得していたことは、母親自身の成熟につながったと考えられる。

これらことは、「第1子の育児は未熟で一生懸命になり、第2子の育児では不安は軽減しても放任的傾向になる。第3子の育児ではようやく育児のベテランになり、比較的安定した育児ができるようになる⁷⁾」と南部の述べたことと一致している。

3 3人の子どもへの育児行動

今回の調査で明らかになったことは、第3子の育児はベテランと言える部分と、3人の子育てを同時に行う育児行動の大変さは、単に育児技術の熟達のみで問題解決されないことを提起している。

生後1カ月は、満足感にあふれ、今までに獲得された育児技術をもって対応することで余裕を持った育児が実感できたが、6カ月位から第3子の育児そのものは概ね満足であるが、3人同時という育児負担に大変であるという実感が出現する。更に、12カ月になると、その思いはピークに達し、3人の狭間に入り、時間に追い立てられ、ストレス絶頂感を呈す。しかし、子育てどっぷりとなり、の覚悟を決め、子どもを客観的にとらえようと努力している。その思いは24カ月になると、更に明確になり、今後の生活にむけて、仕事や子育て以外の準備にとりかかり始めたり、赤ちゃんのお母さんとしての自分を失う寂しさを味わっている。

これらの事実は、第3子そのものの育児不安はあまりなく、育児技術も十分にとれている。しかし、第3子の行動範囲が拡大するに連れて、3人同時の子育てに対して時間、空間のなさがストレスを引き起こしている。しかし、一方で子育ての覚悟があるからこそ乗り越えられ、24カ月頃から将来に向けての目が拓けていくものだと考えられる。

4 第3子育児支援に関する提言

出産と同時に育児支援が必要というよりも、6カ月頃からは支援を多く要する。3人いるために、外で遊ばせることができない、買い物に苦勞するといった内容から、一時預かりやベビーシッターの派遣などが求められる。その際、育児支援は出産に続いて、一時的な場合が多いが、今回のデータを考慮すると、時期や内容については多様性をもたせ、幅広い期間を支援する体制を整えることが必要であろう。

V 結 論

1 第3子の妊娠を計画的に行った割合は41.0%であるが、第3子を望んだ割合は87.2%であった。妊娠の計画性、妊娠希望の有無による出産後の育児に違いがみられるのは、出生直後の母親の反応のみであり、その後の育児において差異はない。

2 第3子の育児の特徴は、上の子の育児体験が活かされ、熟達した育児技術がとれている点にあった。しかし、母親自身の大変さは3人の子どもに同時に対応する時間、空間的な余裕のなさであり、時期的には6カ月頃から始まり、24カ月頃まで続く。

引用・参考文献

- 1) 厚生統計協会：厚生指針 国民衛生の動向，46(9)，41-43，1999.
- 2) 厚生省：厚生白書 平成10年版，ぎょうせい，38-39，1998.
- 3) 諏訪久美子他：子どもの数の決定に関する要因，母性衛生，31(4)，535-536，1990.
- 4) 依田明：きょうだいの研究，大日本図書，26-29，1990.
- 5) 大沢文子：出生率減少；助産婦としての受け止め，助産婦雑誌，45(5)，17，1991.
- 6) 大藪 泰，前田忠彦：乳児を持つ母親の育児満足感の形成要因Ⅰ，小児保健研究，53(6)，826-834，1994.
- 7) 南部春生：経産婦のもつ不安，周産期医学，24(5)，618-623，1994.

A longitudinal descriptive study of the child-caring experiences of mothers in the two-year period following the birth of a third child

ENDO Toshiko, NOZAWA Mieko, ANDO Masako
WATANABE Takemi, FUSHIMI Masae

Abstract

Home visits were conducted a total four times (1,6,12 and 24 months after birth) on 39 mothers who had given birth to a third child during July-September 1995; longitudinal descriptions of the child-caring experiences of these mothers in the two-year period following the birth of their third child were used to identify any special features in the bringing up of a third child.

The results were follows. Difference were observed in post-natal upbringing according to the degree to which the pregnancy was planned or desired, but these differences were found to be due only to the mother's response immediately following the birth and no significant difference was observed later in the child-caring process. Further, one of the characteristic features apparent in the upbringing of a third child was the way in which the experiences gained from the elder children were put to good use and proficient child-caring techniques were adopted. However what made child-caring difficult was the lack of time and spatial freedom in dealing simultaneously with three children and it was clear that this difficult period began around the 6 month point and continued until around 24 months.

Key words: third child, child-caring, mother